

【個人研究】

大学の授業改善に関する試論

太田 和敬*

How can lecturers improve their lectures?

Kazuyuki OTA

Few academicians thought they'd live to see the day when all students wanting to enter a university could do so. But the day has finally come.

Future survival of universities depends on whether or not they can improve their classes and satisfy their students. To that end, we should analyze good lectures and share information on all lectures with each other.

This essay introduces two excellent classes of Bunkyo University's Human Faculty, with careful studies showing what makes students feel satisfied with their university lectures.

In the first example the professor gives his students activities to complete during his lessons, which make the students feel like they are making the lectures with the professor. As well, he hands out the results of their work as well as answers to their questions from the previous lesson. As a result, the students find his lectures interactive.

The second lecture is a more typical example of a teacher who pleases his students with fascinating speeches intertwined with several examples. He says he uses "NLP theory". Generally, it is difficult to communicate with so many students in such a big room, but "NLP enables such communication", he says. His lessons foster active learning among his students, and they feel that they themselves can accomplish what he speaks about in class.

At first we should learn from excellent model lectures, and show accountability for giving marks and home works, etc.

Key words: FD 大学 授業改善 授業評価

* おおた かずゆき 文教大学人間科学部臨床心理学科

1 はじめに

現在、大学はかつて経験したことがない困難な状況に直面している。しかしその危機の本質は、単なる少子化に伴う「経営の危機」ではない。もちろん、現象的には、また、大学人の切実な問題としては「経営の危機」が最も重要である。しかし、「経営の危機」は「原因」であり、また「結果」でもあるが、大学がその危機を乗り越えるために必要な改革を示すものとしては、「大学教育の危機」こそが、本質であると理解されるべきであろう。社会的評価を得られない大学は生き残っていくことができない時代になったのである。

同じような事態に見舞われた経験をもつのはアメリカであり、その克服を通じて、アメリカの大学は様々な教育的工夫をするようになり、それは日本にもスローガンとしては導入されている。その中心はファカルティ・ディベロップメントとして展開し、大学教員の教育技術の開発・向上、運営や協力の体制および技術、その評価の改善などが模索されているが、日本においては実効的な効果はあまり見られない。

文部科学省も、教員の教育能力を向上させるための研修を義務づける、学生への成績評価の厳格

化措置など、実効的な措置を大学に求める姿勢を見せている。(研究中心の大学では、新自由主義的な競争原理が、大学の国際競争という形で激しくなっているが、ここでは論じない。)

このような状況の中で、学生たちの教育に対する意識もより厳しいものになり、受験生も教育の質を吟味して大学を選択するようになってきていると言われている。本稿は、文教大学の教育の向上のために、何が必要なのかを考えるための最初の段階として、特に人間科学部が抱えている基本的な問題を明らかにし、優れた教育を実践している例を分析することによって、全ての教員が教育活動を向上させるために必要な条件を探ろうとしたものである。

2 人間科学部の教育上の問題

大学基準協会に提出した2000年度版「自己点検評価報告書」のアンケートでは、人間科学部は他の学部と比較して、学生による授業評価が高かった。しかし、2006年度の秋学期の学生による授業評価アンケートの全体の平均による公表結果を見る限り、人間科学部の授業に対する評価は、越谷3学部中最低である。(下の表参照)

	越谷全体	湘南全体	人間科学部専門	教育学部専門	文学部専門
説明が丁寧で分かりやすい	4.07	3.88	3.95	4.06	4.05
目的・課題が明確	4.08	3.89	3.98	4.06	4.03
全体と各回の関連が明確	4.04	3.87	3.93	4.06	4.02
教員の準備が周到	4.14	3.98	4.08	4.09	4.1
教材が適切	4.02	3.82	3.91	4.1	4.02
視聴覚教材を的確に使用	3.83	3.72	3.45	3.99	3.75
基本的知識を得た	4.25	4.01	4.16	4.15	4.22
新しい考え・発想に触れた	4.11	3.89	4.06	3.87	4.12
この分野をしっかりと勉強しなければならぬと感じた	4.11	3.86	4	4.1	4.05
全体として受けてよかった	4.23	3.98	4.11	4.16	4.2
実習等量が適当だった	4.16	4.01	4.2	4.06	4.13
実技・実習が講義の役にたった	4.16	4.03	4.2	4.06	4.16

「人間科学の基礎」について2004年度報告書は次のように書く。

「このように、人間科学の基礎は新生生の入学時の大学への適応を支援することがその設置の目的の一つであり、担当教員も積極的に学生に関わり支援しうまく機能していると考えられる。これについては学生たちへの調査結果からも支持されている。『一年次の人間科学の基礎は大学教育に慣れるのに役立つ』という問いに対する肯定的回答は70.7%、否定的回答は11.0%で、大半の学生が人間科学の基礎の意義を認めている。」(2004年度自己点検評価報告書 75ページ)

ところがこの評価はかなり自己満足的な甘い評価であるといわざるをえない事態が起きた。大学の広報誌に、人間科学部の2年生が、教員毎にあまりに異なる授業のやり方は不公平であるという批判をしたのである。人間科学部としてそれを受けて、基本的な部分を揃えるべくガイドラインを定めようということになったが、コンセンサスが得られず結局作成されなかった。

結局、大学の生き残りに必要な「評価」は「自己評価」ではなく、「社会の評価」であり、その最も身近な評価が学生による評価なのである。学生評価から教員は多くを学ばなければならない。

では、具体的に学生たちはどのような見解を述べているのか。(以下の学生の意見は、私の「教育学」の授業の掲示板に書かれた意見である。アドレスは文末。)

大学の授業について、我々教員が考えねばならないことは、まず次のような見解であろう。

「私は今、大学の勉強法に戸惑いを感じている。今まではひたすらこのようなただ知識を詰め込むだけの勉強、大学受験への勉強、それに慣れてしまった私は、大学特有の自分で考え、自分の答えを導く、けっして正解などはない、そんな勉強法に戸惑いを感じているのである。」

大学の授業は、高校までの授業とさまざまな面で異なる。大人数である、出席をとらない授業がある、時間が長い、自分で選択する等々。また、教科書を基本に進める授業はあまりないだろうから、勉強スタイルそのものが異なる。従って、そうしたスタイルの変化に対応できるようなオリエ

ンテーションが必要であろう。

さて、新生生にとって最も多い不満は、大学の授業が一方通行だという点にある。

高校までの授業では、教師は頻りに生徒に質問し、答えさせる形式をとる場合が多い。しかし、大学では、質問を許さないこともあるくらいだから、大教室での講義では、教師が学生に質問したり、あるいは学生が自発的に意見をいったりするように設定された授業はほとんどない。それを一方通行と感じるわけである。しかし、一方通行になるのは、教員だけの責任ではなく、学生の予習等にも問題があるのだが、それを克服するための条件整備は大学に責任があるといえる。

「予習をしなくても困る授業が少なく、先生の話の聞いているだけという授業も少なくない。」

この意見に対しては、次のようなコメントが別の学生から寄せられた。

「私たちはいままで、教えられる立場(受身)であったが、今は学ぶ立場(積極)であることが求められている。だからその変化にとまどってしまっているのはと、私は考えます。」

つまり学生は決して、勉強意欲がないのではなく、意欲があっても条件が整備されていないという側面が強いのである。それを教員自身が気づかないで学生の怠慢、やる気のなさを「言い訳」にしていないだろうか。

またカリキュラム構成に関わる不満もある。

「大学に入ったら自分の興味ある分野の勉強を思う存分できる、と意気込んでいたものの一年のうちは教養科目ばかり。けれど一年次で教養の単位をとっておかないと専門科目に入ってからでは忙しくて大変だと聞き、大して興味のない科目を単位のためだけに無理やり詰め込んでしまいました。そのため大学に入ってから以前と比べてはるかに不真面目になったと思います。」

単一学科だった人間科学部は、リベラルアーツ的な性質をもっていたが、入学時に専門が決まっている臨床心理学科ができて、学部としてのカリキュラム原理上不整合を生じたのだが、それが解決されなかったために、こうした不満がかなり見られた。2008年度から心理学科を設置するに際し、臨床心理学科と心理学科は一年生から専門科

目を導入し、人間科学科はこれまで通り、入学時に所属を決めないために、専門は二年生からという、別建てのカリキュラム構成となったわけである。これで、臨床心理学科や心理学科の学生の「不満」は解消されるが、人間科学科の学生にどのような影響を与えるか、また人間科学部としての統一性がどうなるか、始まってみないとわからない面がある。

3 学生に人気の高い授業の分析

以上から人間科学部の授業は厳しい評価をも受けていることが認識できた。しかし、悪い授業を探し出し、批判する必要はないし、それが授業改善のために効果的でもないだろう。むしろ学生の評価の高い授業を分析し、そこから学ぶことが必要であるように思われる。

(1) 丹治教授の授業分析

故丹治教授の一般教育科目の「心理学」は、文教大学の中でも最も学生の人気の高い授業であった。あまりに受講生が多いので、丹治教授は2コマ開設し、合わせると700名の受講生を毎年集めていた。受講生の中には、単位を必要としない人や、いわゆるモグリ学生もいた。受講生が書き込む楽天主催する大学の授業紹介のホームページでは、人間科学部関係では、圧倒的にこの授業の紹介が多く、しかも、例外なく高い評価が与えられていた。

ビデオに撮ったこの授業は、実は丹治教授が最晩年に行った授業であり、この後わずかな授業をただけで逝去された。そういう点でも貴重な記録である。

この授業の撮影の許可を求めたとき、丹治教授は「私の授業は別に面白くもなんともないですよ。」と何度か強調されたが、確かにいわゆる「面白い」授業ではない。丹治教授は淡々と説明をしていだけで、話にめりはりがあるわけでもなく、また、冗談をいれて笑いをとるなどというようなこともない。しかし人気の秘密は授業開始早々にわかる。

まず前回授業の終わりに提出させた授業に関する「意見・質問」に回答を付して印刷した用紙を

配布し更にそれを解説していく。

自己開示について質問があった。「メールの開示度は手紙ほど高くないのではないか。」という質問だったようだ。これについて、丹治教授は話題を広げながらいくつかの話をしていく。

まず、コミュニケーションのとり方が変わってきた。たとえば授業を欠席するときに、教員に直接いうのではなく、友人にメールして、間接的に連絡してくる。頼む方は楽だけど、直接電話してくれればいいのと思いますが、と学生の安直な姿勢に多少苦言を呈している。

更に開示の実験に関して、実験の倫理性についてコメントをしている。



自己開示実験の説明(ボストン空港で行われた実験についての解説) ※画面をクリックすると動画が再生します。

次に「フロイトの精神分析の本読んだ。忘れ物をするのは、精神的に問題があると書いてある。自分に問題があるのか。」という質問に対して答えている。

物忘れするのはよくあることで、週に4~5回って、少ないのじゃないか。フロイトの理論は実証科学的に論証された事実というわけではない。あくまでも解釈であって、フロイトのことを仮説として考えると、行動が理解しやすくなるということだと解説する。

他にいくつかの注意がなされたあと、今日の内容に関するプリントを配布する。通常はアンケートが配布され、それに記入させる。今日の勉強の内容のためのアンケートだ。これを翌週までに集計・プリントして配布し、結果を説明するという

サイクルになっている。このときは、「心理学の基礎知識」を問うテストが行われた。

一問ずつ読み上げて回答させて、すべての問題をやるのに、やはり30分程度かかった。

そして、いよいよ今日の授業に入るが、すでに1時間は経過している。今日の授業は先週残った部分をやるようで、新しいプリントはない。内容は、ステレオタイプの話だった。

ステレオタイプの例として、顔のきれいな人は性格がよく、能力が高いと見られるという事例についての調査が紹介された。



容姿と人間判断の関係の実験の解説(教師志望者が子どもを容姿で判断しているかどうかのアンケート結果を説明)
※画面をクリックすると動画が再生します。

このような先入観があることを、我々は自覚しなければならない、しかし、自覚しすぎると逆の効果を生むこともあるという説明がなされ、授業が修了した。

(2) 秋山邦久講師の授業分析

専門科目として学生に人気の高い授業に、秋山邦久講師のものがある。秋山氏は、家族療法と家族心理学のふたつの講義を担当しているが、いずれも学生の人气が極めて高い。

実際に受講した学生の語る人気の秘密は以下の通りである。

まず話が面白い。授業のほとんどが守秘義務に注意しながら本質を変えないようにアレンジした実際の体験談で構成され、それが実際に臨床家にならない場合であっても、子育ての場合などに実際に役立つように感じられ、一生懸命に聴く気

なる。話し方もとても巧みで、惹きつけられる。やさしい人柄も授業の魅力ではないか、というようなことであろう。

実際に私がビデオ撮りをしたときに参加した授業でも、具体的な体験談が豊富に語られた。ただ、普段とは異なって資料が配布され、資料には講義の構造(柱)が印刷されていた。それに肉付けをする形で実際の体験が述べられていた。

秋山氏は児童相談所での長い実務経験があり、それが講義で語られる話の中心である。従って、非常にリアルであり、しかも現在の現実の話であるので、学生たちに非常に分かりやすい。

家族療法の秋山氏の授業は以下のように行われた。

はじめに、今日の課題が「コミュニケーション理論 ソリューション・フォーカス・アプローチについて」であることを明確にし板書する。そして、普通、問題が起きると、人生全体が変わってしまう気がして、問題にとらわれるのだが、問題が起きているのは1日数分だけの問題で、ほかの時間帯は問題ない。普通、問題に焦点をあてがちであるが、うまくいっている方にも焦点をあててもいいのではないかというのが、ソリューション・フォーカス・アプローチの考えであることを示し、いじめの相談で、いじめていない子を意識させるなどの具体例を示す。

そして原則的思考として以下のことが定式化されて示される。

- 原因を探さなくても解決できる。
- 問題に焦点をあてると悪循環となるが、うまくいっているところに焦点をあてると、悪循環を断ち切れることがある。
- 小さな変化をどう起こすかが大事である。
- 問題と解決は別のところにある。別物である。
- 相談者全体の生活を尊重する。
- セラピストは何も知らないの、あなたのことを全く知らないの教えてくださいという姿勢が大切(not knowing position)。

このように原則を確認したあとで、具体的な手順を示していく。

1 クライアントが問題を話し、カウンセラーはそれを批判したりせず、また、ロジャースのよ

うに返したりせずに、聴く。

2 タイミングを図ってソリューション・フォーカス・アプローチにもっていく。そのタイミングは

- a 「どうしたらいいか」をクライアントが質問してきたとき。
- b どうどうめぐりになっている。繰り返しのとき。
- c 沈黙に入るとき。(この点も沈黙を大切にするロジャース派とは異なる。)

3 相手の話を切る必要があるときがあるが、止める技法がある。

- a 「なるほど」と強く言う。
- b 「整理をしましょう」といって、要約する。
- c 「考えている様子」を見せる。

4 その人がやっている対処を聞き出す。「そんな大変な状況なのに、どうやって頑張っているんですか。」(coping question, survival question) これは、相手が既にもっている解決を教えてもらうことである。

5 クライアントは、「え？」と反応をするので、「これ大事な質問なので、よく考えて」と言うと、クライアントが話し始める。

たとえば、「命の電話」で一通り聞いたあと、沈黙があるので、「そんな大変ななかで、どうやって電話してくれたんですか？」というように。

6 問題と例外の差別化が必要である。

「そのときは、いまとどんなところが違いますか?」「他にはどんなことがありますか?」「それから?」「そうすると、どうなりますか?」うまくいっているところを膨らませていく。

7 対象をクロスさせる。「他の人はどうしていますか?」

人間は、システムの中で生きているから、システム全体がどうよくなっているかを聞く。

ここが最も重要なポイントで、秋山氏はいくつかの技法や手法を具体的に紹介している。

まずは「隙を作る」という技法。

「あなたがそうしているとき、お子さんはどうしていますか?」

「お父さんはどうしているんですか?」

「二軒となりのおじさんは?」

ここで止まった感じになるので、相手に隙を

作ってあげるという効果がある。そして、隙をつくって「お母さんはどうですか?」と戻ると効果がある。

また、抽象的ではなくあくまでも具体的なことを求めているという手法で、具体的な行動はできるだけ日常的な内容がよいとされる。

ここで、ケースの紹介をした。小学校5年の男の子の例である。女の子にいたずらする。かくれてエッチなことする。学校が騒然とした。暴れたりすることもある、という。面接した親は、悪い人ではないが、子どもが悪者扱いされるので、学校に不信感がある。



学校不信の母親の面接の解説(子ども本人ではなく、母親の生活に焦点をあてて解決した事例)

※画面をクリックすると動画が再生します。

これで、子どもが落ち着いた。しかし、子どもの問題には全く触れていない。それでも子どもが変わる。お母さんがお風呂に長く入るようにする。それで安定していく。

次に福祉事務所で経験したケースである。

おばあちゃんが死にたいといっている。地域で有名な人で、以前学校の先生をしており、名士の家族である。ところが、息子が収賄で逮捕され拘留された。先祖に申し訳ないということで自殺をしようと言っている。家族が、警察に電話するが、息子が逮捕されているので、援助できないということで、福祉事務所に依頼するということになった。



自殺するというおばあちゃんの面接の解説(種に水をまくことを続けるように説得することでよい方向に向かった事例)

※画面をクリックすると動画が再生します。

秋山氏によると、日常的な小さなこと、自分で思ったことが大切であって、孫や娘の話はまわりの人が知っていることであり、本心かどうかは別として、姿勢を変える力はなく、自分で言ったことでなければ解決の力にはならない。「種に水を撒く」というのは、誰からの発言でもなく、自分で考えたことだから、そこに言及することで、自殺を思い止まらせたのだという。

こうして具体例をあげたあと、いくつかの小さな技法「ための技法」「スケーリング・クエスチョン」などを紹介して授業を終わった。

(3) ふたつの授業の提起するもの

ふたつの授業は印象的に非常に異なる。しかし、明確な共通点がある。それは、話の内容が「具体的」であり、それが比較的抽象度の低い「命題」の説明となっている点である。

特に秋山氏の授業は、学生が評価しているように、そういう問題が起きたときに、自分でもできそうだと思うせるところがある。だから、聞いて非常に役立ったという気持ちを起こさせるのである。もちろん、実際に同じような場面に接したときに、専門家と同じようなことができるわけではなく、間違った対応をしたり、何をしてもいいかわからないというのが、実際だろう。しかし、自分でもできると思わせることは、もっと勉強してみようと思わせることであり、それなしには、より深い学習意欲は起きないのだから、そういう意味で、秋山氏の授業意図は見事に実現していると言えるだろう。

秋山氏が、一見自分の体験を具体的に、かつアドリブ的に話しているように思っている学生が多いが、実は周到な準備の下になされている。単にどの話をどこですのかとか、あるいはどの技法、理論のときにどのような具体例を出すかという点だけにとどまらず、NLPというコミュニケーション理論に基づいて授業の構成をたてているという。NLPは基本的にはカウンセリングにおけるクライアントとのコミュニケーションを積極的なものにするための技法を提起する理論であるが、秋山氏はこれが授業における学生とのコミュニケーションに有用だという。もちろん、秋山氏の授業は大教室における講義だから、学生との対話を通して進められるわけではない。どちらかという、一方的な講義の形をとっている。しかし、教師が一方的に話していくからといって、学生とのコミュニケーションが成立しないのではなく、学生の反応をとおした双方のやりとりがあり、学生が発言するわけではなくても、学生がいかにもコミュニケーションをしているかのように、授業を組み立てることが可能だという。確かに、学生たちの話では、秋山氏の授業では、学生は授業に「のめり込んでいる」感じなのである。

しかし、丹治氏はこのようなコミュニケーション論に依拠したやり方をとらない。

丹治氏の授業では、毎回のテーマが明確に決まっている。年度によって異なるだろうが、教育研究所に書いた文章によると、「印象形成実験」、対人魅力要因の「近接要因調査」・「類似要因実験」・「身体魅力調査」・「魅力ある人柄調査」、対人認知に関する「ステレオタイプ実験」・「血液型ステレオタイプ調査・実験」・「情動二要因理論調査」、恋愛行動の「失恋行動調査」などであったという。そして、これは単に講義としての説明だけではなく、こうしたテーマに基づく学生自身によるアンケート調査を毎回実施するのが特徴である。しかも、それを一週間内に集計して、次の時間でその結果を示す。ここに丹治心理学の最も中心的な手法である「学生自身が授業内容を作り上げる要素」が示されている。学生が大学の授業に最も強い不満を持ちやすい「一方通行の授業」とは反対の授業ということになる。しかも、講義の内容がどの

ように調査されるか事例で示され、しかもそれに自分たちが関与し、そして結果が示されるというやり方が、丹治心理学の魅力を形成しているのである。

更に、丹治教授は、授業を向上させるために、毎回授業の感想を書いてもらうようにしており、その結果を更に翌週にプリントして配布するという念のいれようである。私自身そのプリントを見たことがあるが、かなり細かく書かれており、中には丹治教授のやり方にかなり辛辣な批判を書いている学生もいた。学生が丹治教授を信頼しているからこそ書ける内容であり、また、それを堂々と受講生全員に知らせることを躊躇しない丹治教授の姿勢は本当にすごみすら感じさせる。

学生の満足度は次のような学生の意見に示される。

「質問用紙を提出した翌週は、その答えがどうなっているかとわくわくしながら授業に出ることができた」、「一方的な受け身の授業ではなく、授業への参加意識や出席意欲が生じた」、「授業が常に全員参加であるというある種の一体感のようなものを感じた」、「自分たちも授業を作っているという気持ちになった」、「他の受講生の考えを知ることができて興味深かった」。

もちろん、学生にも多様な意見があり、好みも違うだろうが、やはり学生が講義に求める共通項はあるように思われる。

話が聞き取りやすい、最低限話が聞き取れる、授業をする姿勢の積極性等はプラスとなるが、逆に言えば、いやいややっているという姿勢は、学生を大きく失望させる。話の内容としては、特に人間科学部の場合は、現実の生活になんらかの関わり、自分で興味をもてるような具体的な話が含まれることを望んでいる。

ただ、私の経験では、確かにそういう具体的な話は重要であり、人間科学部の学生が興味をもって聴くことは確かであるが、しかし、大学で学ぶ意味は、具体的な話を聞くことだけではなく、そこから「論理的な思考」ができるようになること、抽象的な理論についても自分なりに消化できることにあるだろう。しかし、具体的な話は興味深く聴いていても、いざそこから理論的な掘り下げの

段階になると、とたんにしらけてしまう、聴く姿勢が消極的になるということは何度も経験している。理論的な提示の仕方がまずいということもあるかも知れないが、やはり、学生の理論的な学習への弱点があるのだと考える余地は十分にある。そうすると、これは学生の問題でもあり、その改善にはかなりの工夫が必要であろう。

4 何を始めるべきか

最初に始める必要があることは、大学の教員といえども、授業技術を向上させ、学生に対して効果的な教育を行う能力を形成しなければならないことを確認し、そのために、優れた授業、学生の評価の高い授業から学びながら、情報の共有を進めることである。

同時に優れた授業の技術面についての分析も進める必要がある。同じ内容を教授するなら、聞きやすい口調、分かりやすい構成、効果的な資料の使用など、「授業の技術」があったほうがいい。秋山氏の授業はその優れた実例である。もちろん、技術だけあって、内容のない授業では、大学の授業として失格であろうし、技術だけが優れた授業を生むわけでもない。丹治氏の授業は技術より、授業にかける情熱が学生に感動を与えていた。いずれにせよ、両氏に共通するのは学生が学習意欲をもっているという確信の下に、彼らの学習意欲を満足させるために工夫努力をしている点である。

第二に、現在の大学新入生は次第に変化している。高校の選択制の拡大によって、高校で学んだことに大きな多様性があること、正解を求める形式の授業になれ、大学の学習スタイルに慣れていないことである。従って、大学の教育への導入教育が学生の状況にふさわしい内容と形で実施される必要がある。例えば、大学の学習に必要な読書や作文力があるとしたら、それは大学がきちんと用意しなければならない。アメリカの大学が優れているとされる点はいくつかあるが、そうした「基礎学力」を身につけさせるプログラムがある点も優れた点であるが、日本の大学もそうした基本学力の養成が、大学の正規のカリキュラムの中に位

置づけられる必要がある。

第三に教員に求められている制度的な要請を明確にしていくことである。

大学の授業は基本的に教員が裁量権を保持すべきである。それが大学の自治の根幹だからである。教育内容について、教員の恣意的なやり方は問題であるが、基本的に教員の研究に基づく自由な内容構成が否定されてはならない。しかし、最終的に教授の裁量権であるとしても、説明責任は存在する。それは学生に対して、また、大学に対してである。

学生に対しては、どのような内容の授業をするのか、普段出欠をとるのか、テキストの指定、自習に関する必要なことからの明示とそのチェック方針、そして、成績の認定の方法等は、最初に明確にしておく必要がある。学生は、それを判断材料として、その授業を履修するかどうかを決めるのであり、明示しておく限り、履修条件を承諾したという一種の契約関係が成立していることになる。

最後に授業評価アンケートの改善が必要であろう。現在のアンケートは「自己点検評価」という制度によって要請されている。外在的理由で実施されているに過ぎない。それを教育活動の改善に有効であるような内容や形式に改善していかねばならない。現在のアンケートの内容と形式は教育活動の改善には有効とは言えない点が多々あるからである。

(なお本稿はページの関係で要約したものであり、全稿は私のホームページに掲載されている。

<http://www.asahi-net.or.jp/~fl5k-oot/>